

大学入試センター試験連続志願者の科目選択行動 —新課程科目導入に伴う影響を中心にして—

研究開発部評価・追跡研究部門 鈴木 規 夫

研究開発部特別試験研究部門 内 田 照 久

1997年より大学入試センター試験は、新学習指導要領に基づく科目によって実施された。以前と比べての大きな変更点は、社会が地理歴史（世界史、日本史、地理）と公民（現代社会、倫理、政治・経済）の2教科にわかれたこと、さらに地理歴史および理科においては従来の4単位のB科目の他に2単位のA科目が加わったことがあげられる。

本研究は、このような新課程科目導入に伴う影響を調べるため、旧課程による試験（1996）と新課程による試験（1997）のいずれにも出願した連続志願者を対象にして、新旧の科目選択の関係について旧課程試験での得点等を指標にしてクラスター分析を行った。分析では、科目選択行動の安定性を調べるため、さらに次年度の新課程1年目と2年目へ出願した者についても調べた。分析の結果得られた主な知見は以下の通りである。

（1） クラスター分析によって5つのクラスターを見出すことができた。

そのうち、2つの代表的なクラスターの特徴について述べる。一つは大多数の受験生が属するクラスターで、新課程と旧課程で同じB科目を選択するクラスターである。このクラスターは、旧課程の試験で高い得点をとる傾向にあった。もう一つは受験者数は少数ではあるが、旧課程でB科目を受験したのが新課程ではA科目に変更するクラスターである。彼らは、旧課程試験で低得点をとったものが多く、A科目の導入に強い影響を受けており、トライアル的な色彩の強い科目選択行動をとる集団であると想定される。

（2） 旧課程—新課程試験間の科目選択関係は、新課程の1年目—2年目でも同様な傾向を示していた。新課程1年目のテスト結果が高い者は2年目でも同じ科目を選択する傾向が強く、得点の低かった者は1年目とは異なる科目を選択する傾向にあることが分かった。つまり、初年度における得点の高低が、次年度の科目選択行動に影響を及ぼすことが確認された。